

舞姫

森鷗外



石炭をば早はや積み果てつ。中等室つぐゑの卓つくゑのほとりはいと静しずにて、熾熱燈しねつとうの光ひかりの晴はれがましきも徒いたづらなり。今宵こんやは夜毎よごとにこゝに集あひ来る骨牌仲間カルタも「ホテル」に宿とどりて、舟ふねに残のこれるは余一人ひとりのみなれば。

五年前いつとせまへの事ことなりしが、平生ひじろの望のぞ足りて、洋行やうぎやうの官命かうめいを蒙かり、このセイゴンの港みなとまで来こし頃は、目めに見みるもの、耳みみに聞きくもの、一つとして新あらたならぬはなく、筆ふでに任まかせて書しき記しつる紀行文日きぎんぎふごとに幾千言いくせんげんをかなしけむ、当時たうじの新聞しんぶんに載のせられて、世よの人ひとにもてはやされしかど、今日けふになりておもへば、穉をさなき思想しゆきやう、身みの程ほど知らぬ放言はうげん、さらぬも尋常よのつねの動植金石どうしつせき、さては風俗ふうぞくなどをさへ珍めづしげにしるしゝを、心こころある人ひとはいかにか見みけむ。こたびは途みちに上ありしとき、日記にきものせむとて買かひし冊子さつしもまだ白紙はくしのまゝなるは、独逸ドイツにて物学ぶつがくびせし間まに、一種いっしゆの「ニル、アドミ

ラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東ひんがしに還かへる今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶なほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に写して誰たれにか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼あゝ、ブリンヂイシイの港いを出いで、より、早や二十日はつかあまりを經ぬ。世の常ならば生面せいめんの客にさへ交まじはりを結びて、旅の憂さを慰めあふが航海なうひの習ならひなるに、微恙びやうにことよせて房へやの裡うちにのみ籠こもりて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨わがに頭かしらのみ悩ましたればなり。此恨このは初め一抹の雲の如く我心わがを掠かすめて、

スミス
瑞西の山色をも見せず、伊太利イタリアの古蹟にも心を留めさせず、中
頃は世を厭いとひ、身をはかなみて、腸日はらわたごとに九廻すともいふべ
き惨痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳かげ
とのみなりたれど、文読ふみむごとに、物見るごとに、鏡に映る影、
声に応ずる響の如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度いくたびとな
く我心を苦む。嗚呼、いかにしてか此恨を銷せうせむ。若もし外ほかの恨
なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地こゝちすがくしくもなりな
む。これのみは余りに深く我心に彫えりつけられたればさはあら
じと思へど、今宵はあたりにも無し、房奴ぼうじとの来て電気線の鍵
を振ひねるには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて
見む。

余は幼き比ころより厳しき庭の訓を受けし甲斐かひに、父をば早く喪うしな
ひつれど、学問の荒すさみ衰ふることなく、旧藩の学館にありし日

も、東京に出で、予備鬢よびくわうに通ひしときも、大学法学部に入りし
後も、太田豊太郎とよたろうといふ名はいつも一級の首はじめにしるされたりし
に、一人子ひとりごの我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十
九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までに
またなき名誉なりと人にも言はれ、某省なにかしに出仕して、故郷なる
母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の
覚え殊ことなりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を
受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇
み立ちて、五十を踰こえし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、
遙々はるばると家を離れてベルリンの都に来ぬ。

余は模糊もこたる功名の念と、検東に慣れたる勉強力とを持ちて、
忽ちたちまこの欧羅巴ヨオロッパの新都の中央に立てり。何等なんらの光彩ぞ、我目
を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩

提樹下と訳するときは、幽静なる境さかひなるべく思はるれど、この大道かみ髪の如きウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だ、みの人道を行く隊々くみぐの士女を見よ。胸張り肩そび聳えたる士官の、まだ維廉キルヘルム一世の街に臨める窓まどに倚より玉ふ頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍かほよき少女の巴里パリまねびの粧よそほひしたる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青チヤンの上を音もせて走るいろくの馬車、雲に聳ゆる楼閣の少しとぎれたる処ところには、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲みなぎり落つる噴井ふきみの水、遠く望めばブランデンブルク門を隔て、緑樹枝をさし交かはしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多あまたの景物目睫もくせふの間に聚あつまりたれば、始めてこゝこに来しもの、応接いしよまに追なきも宜うべなり。されど我胸には縦たとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物

を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけの紹介状を出だして東来の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。さて官事の暇あるごとに、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第に捗り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、つひには幾巻をかなしけむ。大学のかたにて

は、穉き心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵かうえんに列つらなることにおもひ定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。

かくて三年みとせばかりは夢の如くにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒ほむるが嬉はしさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ほげますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥おだやかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜よろしからず、また善く法典を諳そらんじて獄を断

ずる法律家になるにもふきはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私ひそかに思ふやう、我母は余を活いきたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣さ々たる問題にも、極めて丁寧ていねいにいらへしつる余が、この頃より官長に寄する書には連しきりに法制の細目に拘かづらふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべしなど、広言しつ。又大学にては法科の講筵よそを余所によそして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗しよを嚼かむ境に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懐いだきて、人なみならぬ面おももちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆くつがへすに足らざりけんを、日比伯林ひしろベルリン

の留学生の中うちにて、或る勢力ある一群ひとむれと余との間に、面白からぬ関係ありて、彼人々は余を猜疑さいぎし、又遂つひに余を讒誣ざんぶするに至りぬ。されどこれとても其故なくしてやは。

彼人々は余が俱ともに麦酒ビールの杯をも挙げず、球突きキユウの棒をも取らぬを、かたくななる心と慾を制する力とに帰して、且かつは嘲あざけり且は嫉ねたみたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎いかでか人に知らるべき。わが心はかの合歡ねむといふ木の葉に似て、物触さわれば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学まなびの道をたどりしも、仕つかへの道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯ただ一条ひとすぢにたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄て、顧みぬ程の勇

気ありしにあらず、唯たゞ外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、又我心の能く耐へんことをも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、天晴あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾しゆきんを濡らしつるを我れ乍ながら怪しと思ひしが、これぞなかくに我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、又早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

かの 彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面おもてを塗りて、赫然かくぜんたる色の衣を纏まとひ、珈琲店カッフエエに坐して客を延ひく女をみなを見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西プロシヤにては貴族めきたる鼻音にて物言ふ「レエベマン」を見ては、往きてこれと遊ばん勇氣

なし。此等の勇氣なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らんやうもなし。この交際の疎うときがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみならず、又余を猜疑することゝなりぬ。これぞ余が冤罪ゑんざいを身に負ひて、暫時の間に無量の艱難かんなんを閲けみし尽す媒なかたちなりける。

或る日の夕暮なりしが、余は猷苑を漫歩して、ウンテル、デ
ン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居けうきよに帰らんと、ク
ロステル巷かうの古寺の前に来ぬ。余は彼の燈火ともしびの海を渡り来て、
この狭く薄暗き巷こうぢちに入り、楼上の木欄おぼしまに干したる敷布、襦袢はだぎな
どまだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁おきなが戸前こぜんに佇たゞずみたる
居酒屋、一つの梯はしは直たかどのちに楼たかどのに達し、他の梯あなぐらは窖あなぐら住まひの鍛冶かぢ
が家に通じたる貸家などに向ひて、凹字あふじの形に引籠みて立てら
れたる、此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し

佇みしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖とざしたる寺門の扉に倚りて、
声を呑みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なる
べし。被りし巾きんを洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着た
る衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへり
みたる面おもて、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。こ
の青く清らにて物問ひたげに愁うれひを含める目の、半ば露を宿せる
長き睫毛まつげに掩おほはれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深
き我心の底まで徹したるか。

彼は料はからぬ深き歎きに遭あひて、前後を顧みる違いとまなく、こゝに立
ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫れんぴんの情に打ち勝たれて、余
は覚えぞぼず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫累けいるみなき外人よそびと
は、却かへりて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我

ながらわが大胆なるに呆れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色に形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは慚はぬに、家に一銭の貯だになし。」

跡は歔歔の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えぬ我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始てわれを見たるが如

く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしきに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。少女は鏽びたる針金の先きを振ぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老媪おうなの声して、「誰ぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪あしき相にはあらねど、貧苦の痕を額ぬかに印せし面の老媪にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に会釈して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇はげしくたて切りつ。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈ラムプの光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆うるしもて書き、下に仕立物師

と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老媪は慇懃いんぎんにおのが無礼の振舞せしを詫わびて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨くりやにて、右手めでの低き窓に、真白ましろに洗ひたる麻布を懸けたり。左手ゆんでには粗末ゆんでに積上げたる煉瓦かまどの竈かまどあり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布しらぬのを掩へる臥床ふしどあり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処いはゆるは所謂「マンサルド」の街に面したる一間ひとまなれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜なに下れる梁はりを、紙にて張りたる下の、立たば頭かしらの支つかふべき処ところに臥床あり。中央なる机には美しき氈かもを掛けて、上には書物一二巻と写真帖しやしんていとを列ならべ、陶瓶たうへいにはこゝこゝに似合はしからぬ価あたい高き花束を生けたり。そが傍かたはらに少女は羞はぢを帯びて立てり。

彼は優すぐれて美なり。乳ちの如き色の顔は燈火に映じて微紅うすくれなゐを潮
したり。手足かぼそたの纖そく裊たなるは、貧家の女をみなに似ず。老媪へやの室を出
でし跡にて、少女は少し訛なまりたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君
をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも
憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬はふり、たのみに思ひしシヤウムベ
ルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「キクトリア」座ざの座頭ざがしら
なり。彼が抱へとなりしより、早や二年ふたとせなれば、事なく我等を
助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛け
せんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を析さきて還し参
らせん。縦令よしや我身は食くらはずとも。それもならずば母の言葉に。」
彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目まみには、人に
否いなとはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又
自らは知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはずして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のたれに出したる手を唇にあてたるが、はらくと落つる熱き涙を我手の背に濺ぎつ。

嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとして、自ら我僑居に來

し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、

終日兀坐する我読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。こ

の時を始として、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同

郷人にさへ知られぬれば、彼等は速了にも、余を以て色を舞姫

の群に漁するものとしたり。われ等二人の間にはまだ痴騷なる

歡樂のみ存したりしを。

その名を斥ささんは憚はゞかりあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余が屢しばしば芝居に出入して、女優と交るといふことを、官長の許もとに報じつ。さらぬだに余が頗すこぶる学問の岐路きろに走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に伝へて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命を伝ふる時余に謂いひしは、御身おんみ若し即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らんに、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我生涯もつとにて尤も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通は殆ど同時にいだし、ものなれど、一は母の自筆、一は親族なにかしなる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書ふみなりき。余は母の書中の言をこゝに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運はこびを妨ぐれば

なり。

余とエリスとの交際は、この時までには余所目よそめに見るより清白なりき。彼は父の貧きがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつりに応じて、この恥づかしき業わざを教へられ、「クルズス」果て、後、「キクトリア」座に出で、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが当世の奴隷といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋きがれ、昼の温習、夜の舞台と緊きびしく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝なれば、親腹からを養ふものはその辛苦いかに奈何いかにぞや。されば彼等の仲間にて、賤いやしき限りなる業おに墮おちぬは稀まれなりとぞいふなる。エリスがこれを追のがれしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物

読むことをば流石さすがに好みしかど、手に入るは卑しき「コルポル
タアジユ」と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識あひしる頃
より、余が借しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉
の訛なまりをも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字あやまりじ少なく
なりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたる
なりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余
は彼が身の事に関りしを包み隠しぬれど、彼は余に向ひて母に
はこれを秘め玉へと云ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知り
て余を疎うとんぜんを恐れてなり。

嗚呼、委くはしくこゝに写さんも要なけれど、余が彼を愛めづる心の
俄にはかに強くなりて、遂に離れ難き中となりしは此折なりき。我一
身の大事は前に横よこたはりて、洵まことに危急存亡の秋ときなるに、この行おこなひあり
しをあやしみ、又た誹そしる人もあるべけれど、余がエリスを愛す

る情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我^{さくき}数奇を
憐み、又別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢^{びん}の毛の解けてかゝ
りたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激に
よりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にこゝに及びし
を奈何^{いか}にせむ。

公使に約せし日も近づき、我命^{めい}はせまりぬ。このまゝにて郷
にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ。
さればとて留まらんには、学資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東
京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に
出でしを見て、某新聞紙の編輯^{へんしふちやう}長に説きて、余を社の通信員と
なし、伯林^{ベルリン}に留まりて政治学芸の事などを報道せしむることと
なしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家すみかをもうつし、午餐ひるげに往く食店たべものみせをもかへたらんには、微かすかなる暮しは立つべし。兎角とかう思案する程に、心の誠まことを頭あちはして、助の綱をわれに投げ掛けしはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼等親子の家に寄寓することゝなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合せて、憂きがなかにも楽しき月日を送りぬ。

朝カツラエの咖啡果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所おもしに赴おもむき、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出で、彼此と材料を集む。この截きり開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業わざなき若人わかうど、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙ぬすを偷みて足を休むる商人あきうどなどと臂ひぢを並べ、冷な

る石卓いししやくの上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て来る一盞ひとつきの咖啡の冷さむるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを、幾種いくしゆとなく掛け聯つらねたるかたへの壁に、いく度となく往来ゆきぎする日本人を、知らぬ人は何とか見けん。又一時近くなるほどに、温習に往きたる日には返り路ぢうによぎりて、余と俱ともに店を立出づるこの常ならず軽き、掌上しやうじやうの舞をもなしえつべき少女を、怪み見送る人もありしなるべし。

我学問は荒すさみぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが劇場よりかへりて、椅いすに寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔しの法令条目の枯葉を紙上に搔寄かきよせしとは殊にて、今は活潑々たる政界の運動、文学美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあはせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりは寧ろハイネを学びて思を構へ、様々の文ふみを作りし中にも、引

続きて維廉^{キルヘルム}一世と仏得力三世との崩殂^{ほうそ}ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退^{いかん}如何などの事に就ては、故ら^{こゝろ}に詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書を繙^{ひもと}き、旧業をたづぬることも難く、大学の籍はまだ刪^{けつ}られねど、謝金を収むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵^{かうでん}だに往きて聴くことは稀なりき。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。それをいかにといふに、凡そ民間学の流布^{るふ}したることは、歐洲諸国の間にて独逸^{とつ}に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論^{ろん}には頗^{すこぶ}る高尚なるもの多きを、余は通信員となりし日より、曾て大学に繁^{かつ}く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みては又読み、写しては又写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括^{おのづか}的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢

にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに。

明治廿一年の冬は来にけり。表街おもてまちの人道にてこそ沙すなをも蒔まけ、
※《すき》をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹とつあふかんか坎垆かんかの処は
見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢こいゑ凍こいえ
し雀の落ちて死にたるも哀れなり。室へやを温め、竈かまどに火を焚こきつ
けても、壁の石を徹し、衣の綿うがを穿うつ北歐羅巴の寒さは、なか
くくに堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞台にて卒倒し
つとて、人に扶たすけられて帰り来しが、それより心地あしとて休
み、もの食ふごとに吐くを、悪阻つはりといふものならんと始めて心
づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覚おぼ束つかなきは我身の行末な
るに、若まことし真まことなりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は樂しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小き鉄炉の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。この時戸口に人の声して、程なく庖厨にありしエリスが母は、郵便の書状を持って来て余にわたしつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。訝りつゝも披きて読めば、とみの事にて預め知らするに由なかりしが、昨夜こゝに着せられし天方大臣に附きてわれも来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名譽を恢復するも此時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみひ遣るとなり。読み畢りて茫然たる面もちを見て、エリス云ふ。「故郷よりの文なりや。悪しき便にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならん。「否、心にな掛けそ。おん身も名を知る相沢が、大臣と俱にこゝに来てわれを呼ぶなり。」

急ぐといへば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出し遣る母もかくは心を用るじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袴も極めて白きを撰び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロツク」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が為めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰れも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何故にかく不興なる面もちを見せ玉ふか。われも諸共に行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豊太郎の君とは見えず。」又た少し考へて。「縦令富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宣ふ如くならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは

絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等「ドロシユケ」は、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼を下りつ。彼は凍れる窓を明け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホオフ」の入口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を登り、中央の柱に「プリユツシユ」を被へる「ゾファ」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脱ぎ、廊をつたひて室の前まで往きしが、余は少し踟蹰したり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、けふは怎なる面もちして出迎ふらん。室に入りて相對し

て見れば、形こそ旧に比ぶれば肥えて逞たくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにも違いとまあらず、引かれて大臣に謁し、委托せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻譯せよとの事なり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相沢は跡より来て余と午餐ひるげを共にせんといひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑おほむなりしに、軼軻かんか数奇さくきなるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、かれは屡々驚きしが、なか／＼に余を譴せめんとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢をはりしとき、彼は色を正して諫いさむるやう、この一段のことは素もと生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、学識あ

り、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活なりはひをなすべき。今は天方伯も唯だ独逸語を利用せんの心のみなり。おのれも亦伯またが当時の免官の理由を知れるが故に、強しひて其成心を動かさんとせず、伯が心中にて曲庇者きよくひものなりなど思はれんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦すすむるは先づ其能を示すに若しかず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との関係は、縦令彼に誠ありとも、縦令情交は深くなりぬとも、人材を知りてのこひにあらざ、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して断てと。是これその言ことのおほむねなりき。

大洋に舵かぢを失ひしふな人が、遙はるかなる山を望む如きは、相沢が余に示したる前途ほうしんの方鍼なり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果して往きつきぬとも、我中心

に満足を与へんも定かならず。貧きが中にも樂しきは今の生活なりはひ、
棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めんよしなかり
しが、姑しばらく友の言ことに従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は
守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれど
も、友に対して否とはえ対こたへぬが常なり。

別れて出づれば風面おもてを撲うてり。二重ふたへの玻璃窓ガラスを緊しく鎖して、
大いなる陶炉に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、
薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚粟立はだへあはだつ
と共に、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。「カイゼルホオフ」へ通ふことはこ
れより漸く繁くなりもて行く程に、初めは伯の言葉も用事のみ
なりしが、後には近比ちかごろ故郷にてありしことなどを挙げて余が意
見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを

告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて、「余は明日あす、魯西亞ロシアに向ひて出発すべし。随したがひて来くべきか、」と問ふ。余は数日間、かの公務に違なき相沢を見ざりしかば、此問は不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我恥を表はさん。此答はいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟とつさの間、その答の範圍を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、その為なし難きに心づきても、強しひて当時の心虚なりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを実行すること屢々なり。

此日は翻譯しよの代に、旅費さへ添たまへて賜たまはりしを持って歸りて、翻譯しよの代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り来んまでの費つひえをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりと

いふ。貧血の性さがなりしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我心を厚く信じたれば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合せて借りたる黒き礼服、新に買求めたるゴタ板の魯廷ろていの貴族譜、二三種の辞書などを、小「カバン」に入れたるのみ。流石に心細きことのみ多きこの程なれば、出で行く跡に残らんも物憂かるべく、又停車場にて涙こぼしなどしたらんには影護うしろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出いだしやりつ。余は旅装整へて戸を鎖し、鍵をば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行につきては、何事をか叙すべき。わが舌人たる任務は
忽たちまち地に余を拉らっし去りて、青雲の上に墮おとしたり。余が大臣の一行
に随ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を圍繞みねうせしは、巴里
絶頂けうしやの驕奢けうしやを、氷雪うぢの裡うちに移したる王城まうしよくの粧飾けいじき、故らこゝろに黄蠟わうらふの
燭しよくを幾つ共なく点ともしたるに、幾星の勳章、幾枝の「エポレット」
が映射する光、彫鏤てうるの工たくみを尽したる「カミン」の火に寒さを忘
れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間仏蘭西語を最も円滑
に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を弁ず
るものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書ふみを寄せし
かばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて燈
火に向はん事の心憂もとさに、知る人の許もとにて夜に入るまでも語
りし、疲るゝを待ちて家に還り、直ちにいねつ。次の朝あした目醒め

し時は、猶独り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かゝる思ひをば、生計たつきに苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書の略あらましなり。

又程経てのふみは頗る思ひせまりて書きたる如くなりき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心の深き底そこひをば今ぞ知りぬる。君は故里ふるさとに頼もしき族やからなしとのたまへば、此地に善き世渡のたつきあらば、留り玉はぬことやはある。又我愛もて繋ぎ留めでは止やまじ。それも慥かなはで東ひんがしに還り玉はんとならば、親と共に往かんは易けれど、か程に多き路用いづくを何処よりか得ん。怎いかなる業をなしても此地に留りて、君が世に出で玉はん日をごそ待ためと常には思ひしが、暫しの旅とて立出で玉ひしより此二十日ばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。袂たもとを分つはたゞ一瞬の苦艱くげんなりと思ひしは迷なりけり。我身の常ならぬが

漸くにしるくなれる、それさへあるに、縦令よしやいかなることありとも、我をば努ゆめな棄て玉ひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東ひんがしに往かん日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉はゞ、我路用の金は兎も角もなりなん。今は只管ひたすら君がベルリンにかへり玉はん日を待つのみ。

嗚呼、余は此書を見て始めて我地位を明視し得たり。恥かしきはわが鈍にぶき心なり。余は我身一つの進退につきても、また我身に係らぬ他人ひとの事につきても、決断ありと自ら心に誇りしが、此決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照さんとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが尽した

る職分をのみ見き。余はこれに未来の望を繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて想到おもひらざりき。されど今こゝに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟か。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の禽とりの如くなりしが、今は稍や々これを得たるかと思はるゝに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰りて後も俱にかくてあらば云々しかぐといひしは、大臣のかく宣のたまひしを、友ながらも公事なれば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が軽卒にも彼に向ひてエリスとの関係を絶たんといひしを、早く大臣に告げやしけん。

嗚呼、独逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。曩さきにこれを繰あやつりしは、我某省わがなにかしの官長にて、

今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一
行と俱にベルリンに帰りしは、恰あたかも是れ新年の旦あしたなりき。停車
場に別を告げて、我家をさして車を驅かりつ。こゝにては今も除
夜に眠らず、元旦に眠るが習なれば、万戸寂然たり。寒さは強
く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、き
らくくと輝けり。車はクロステル街に曲りて、家の入口に駐とどま
りぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えぬ。馭ぎよてい丁に「カ
バン」持たせて梯を登らんとする程に、エリスの梯を駈け下る
に逢ひぬ。彼が一声叫びて我頸うなじを抱きしを見て馭丁は呆れたる
面もちにて、何やらむ髭ひげの内にて云ひしが聞えず。「善くぞ帰り
来玉ひし。帰り来玉はずば我命は絶えなんを。」

我心はこの時まで定まらず、故郷を憶おもふ念と栄達を求むる心
とは、時として愛情を圧せんとせしが、唯だ此一刹せつな那、低徊踟躕ていくわいちちう

の思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我肩に倚りて、彼が喜びの涙ははらくと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼の如く叫びし馭丁は、いち早く登りて梯の上に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁を勞ひ玉へと銀貨をわたして、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白き「レエス」などを堆く積み上げたれば。

エリスは打笑みつゝこれを指して、「何とか見玉ふ、この心がまへを。」といひつゝ、一つの木綿ぎれを取上ぐるを見れば襦袢なりき。「わが心の楽しさを思ひ玉へ。産れん子は君に似て黒き瞳子をや持ちたらん。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳子なり。産れたらん日には君が正しき心にて、よもあだし

名をばなのらせ玉はじ。」彼は頭を垂れたり。「穉しと笑ひ玉は
んが、寺に入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には
涙満ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとて敢て訪ら
はず、家におのみ籠り居しが、或る日の夕暮使して招かれぬ。往
きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亜行の労を問ひ慰めて後、
われと共に東にかへる心なきか、君が学問こそわが測り知る所
ならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留の余りに久し
ければ、様々の係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さること
なしと聞きて落居たりと宣ふ。其気色辞むべくもあらず。あな
やと思ひしが、流石に相沢の言を偽なりともいひ難きに、若し
この手にしも縫らずば、本国をも失ひ、名誉を挽きかへさん道
をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと

思ふ念、心頭を衝いて起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承うけたまはり侍りはべ」と応へたるは。

黒がねの額はありとも、歸りてエリスに何とかいはん。「ホテル」を出でしときの我心の錯乱は、譬へんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。暫くしてふとあたりを見れば、獣苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の辺の榻に倚りて、灼くが如く熱し、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻背に持たせ、死したる如きさまにて幾時をか過しけん。劇しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の庇、外套の肩には一寸許も積りたりき。

最早十一時をや過ぎけん、モハビツト、カル、街通ひの鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門の畔の瓦斯とろう

は寂しき光を放ちたり。立ち上らんとするに足の凍えたれば、両手にて擦りて、漸やく歩み得る程にはなりぬ。

足の運びの捗らねば、クロステル街まで来しときは、半夜をや過ぎたりけん。こゝ迄来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えぬ。我脳中には唯々我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ちくたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずと覚ぼしく、爛然たる一星の火、暗き空にすかせば、明かに見ゆるが、降りしきる鷺の如き雪片に、乍ち掩はれ、乍ちまた顕れて、風に弄ばるゝに似たり。戸口に入りしより疲を覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて

入りしに、机に倚りて襦袢縫ひたりしエリスは振り返へりて、「あ」と叫びぬ。「いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜なりけり、蒼然として死人に等しき我面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪は蓬ろと乱れて、幾度か道にて跌き倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汗れ、処々は裂けたれば。

余は答へんとすれど声出でず、膝の頻りに戦かれて立つに堪へねば、椅子を握まんとせしまでは覚えしが、その儘に地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは数週の後なりき。熱劇しくて譫語のみ言ひしを、エリスが慙にみとる程に、或日相沢は尋ね来て、余がかれに隠したる顛末を審らに知りて、大臣には病の事のみ告げ、よきやうに繕ひ置きしなり。余は始めて、病牀に侍するエリスを見て、その変りたる姿に驚きぬ。彼はこの数週の内にい

たく痩せて、血走りし目は窪み、灰色の頬ほは落ちたり。相沢の助にて日々の生計たつきには窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺しゝなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞え上げし一諾を知り、俄にはかに座より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に僵たふれぬ。相沢は母を呼びて共に扶たすけて床に臥させしに、暫くして醒めしときは、目は直視したるまゝにて傍の人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髪をむしり、蒲団ふとんを噛みなどし、また遽にはかに心づきたる様にて物を探り討もとめたり。母の取りて与ふるものをば悉く抛なげうちしが、机の上なりし襦袢を与へたるとき、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用は殆ほとんど全く廃して、その痴ちなること赤児の如くなり。医に見せしに、過劇なる心労にて急に起りし「パラノイア」といふ病やまひなれば、治癒の見込なしといふ。ダルドルフの癲狂院てんきやうあんに入れむとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出しては見、見ては歔歔ききよす。余が病牀をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。たゞをりく思ひ出したるやうに「薬を、薬を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍かばねを抱きて千行ちすぢの涙を濺そぎしは幾度ぞ。大臣に随ひて帰東の途に上ぼりしときは、相沢はかと議かりてエリスが母に微かすかなる生計たつきを営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺し、子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。

嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡なうりに一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり。

(明治二十三年一月)

舞姫

底本：「現代日本文学大系 7」筑摩書房

1969（昭和 44）年 8 月 25 日初版第 1 刷発行

1985（昭和 60）年 11 月 10 日初版第 15 刷発行

入力：多羅尾伴内

校正：蔣龍

2004 年 6 月 29 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。